トマス・グレイ研究

トマス・グレイ研究

福原麟太郎著作集 3

福原麟太郎著作集 3
トマス・グレイ研究
昭和四十四年五月二十日 印刷
昭和四十四年五月二十五日 発行
定価 一、三〇〇円
著作者 福原麟太郎
発行者 小酒井益蔵
印刷者 小酒井益三郎
印刷所 研究社印刷株式会社
発行所 研究社出版株式会社
郵便番号一六二
東京都新宿区神楽坂一の二
電話東京(二六九)四五二一(代表)
振替東京 八三七六一
(乱丁・落丁本はお取替え致します)

© R. Fukuhara Printed in Japan

目次

はしがき

一　「挽歌」の作者として……三
二　ケイムブリッヂの隠者……八
三　グレイ伝……一三
四　イギリス文学史上のグレイ……一七

評伝『トマス・グレイ』

一　成長期……二一
二　大陸旅行……三三
三　詩人としての出発……四二

四　「挽歌」の時代……六三
五　「頌詩」の時代……一〇一
六　大英博物館……一三八
七　ケイムブリッヂ隠棲……一五八

『トマス・グレイ研究抄』

I　序　文……一九〇
トマス・グレイ年表……一九六
トマス・グレイ研究書……二〇一
II　トマス・グレイ――その時代と人と詩と詩論……二〇八
一　十八世紀前半の英国詩……二〇八
二　ポウプの時代と新しい詩……二二四
三　新しい詩歌……二三〇
四　憂鬱の文学……二三六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五　ヂョンソン博士の時代におけるグレイ……二三六
六　ケイムブリッヂの隠者……二四六
七　新詩壇のグレイ……二五九
八　グレイの詩と詩論……二六六
九　グレイの表現と思想……二七八

III　トマス・グレイの「挽歌」――その構造と原形……二二二
グレイの「挽歌」と日本……二四六

IV　シェイクスピアとトマス・グレイ……二六六
トマス・グレイとリチャード・ウェスト……二七三
コリンズとグレイ……二八七
エムプソンとグレイ……二九八

V　あとがき……四一六
一　猫の詩……二九八
二　「挽歌」……四〇五

参考書目……四二一

グレイ拾遺

成長期のトマス・グレイ……四三七
ウィリアム・アップコット……四五七
ストウク・ポウヂズ……四六一
トマス・グレイの本のこと……四六九
グレイを訳して……四七三
書誌学的な思い出……四七六
新トマス・グレイ伝……四八三
グレイゆかりの土地……四九〇
トマス・グレイに関して……四九四
楽屋ばなし……四九八
グレイとラム……五〇五

トマス・グレイ全詩集……五〇九
あとがき……五一九
掲載紙誌一覧表……五三一
グレイ墓前の著者　対本扉
『ベントレー氏装画グレイ氏六詩集』扉　対八六
ピーターハウスおよびペムブルック学寮　対八七
エックハルト筆グレイ肖像　対三六
「挽歌」イートン稿本
同ペムブルック稿本
同エヂャートン稿本
同『グレイ詩集』（一七六八年）
グレイ肖像（一七七〇年頃）　対三七
ストウク・ポウヂズ教会　対四〇
メイソン編『グレイ詩集』扉　対四一

はしがき

一　「挽歌」の作者として

トマス・グレイ(Thomas Gray, 1716–71)は、わが国で古くから親しまれている詩人である。しかも、その知られている詩は、ただ一つに限られていたと言ってよい。それは岩波本訳詩集で、「田舎の墓地で詠んだ挽歌」という題で訳されているもので、英米でも昔からグレイの挽歌(エレヂー)と呼ばれて有名である。英米でそうであったものだから、英文学名作選などに入れられて、早くから日本へも渡来し、サンマースとか、ホートンとか、コックスとか、ディクソンとかいう明治夙期の英文学教師に教えられて英学生の愛誦するところとなったものと思われる。

最初の翻訳は明治十五年『新体詩抄』に載った矢田部尚今居士の「グレー氏墳上感懐(ふんじょうかんかい)の詩」であった。第一聯は

山々かすみいりあひの　鐘はなりつつ野の牛は
徐(しづか)に歩み帰りゆく　耕(たがや)へす人もうちつかれ
やうやく去りて余(われ)ひとり　たそがれ時に残りけり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

となっており有名である。その後、「野寺の庭」（大和田建樹）とか「墳上哀詩」（増田藤之助）とかいう題その他で幾度も訳され、坪内逍遙講述『英国文学史』（明治三十四年）には「『墓畔吟』は、夙に我が読詩社会の熟知せる所、故に今多く論ぜず」としてあるほどいわば人口に膾炙した。大正の始め、英学生の間に多く読まれた桜井鷗村の『英詩評釈』には「墓畔の哀歌」という訳名で原文対訳註が出ている。昭和十二年八月号『文芸』で近松秋江は増田藤之助氏が『日本英学新誌』（明治二十五―三十二年）に掲載した「田舎の墓地にて詠める悲歌」について、

> 四十年来私の忘れることの出来ない英詩が、ここにある。……固より私には、英詩の古典的な諧調妙音は解らない。唯それを漢詩調の文章体に和訳した処に、私の胸にピタリと来るものがあるのだ。
>
> 要之作者グレーは貴人権威に反撥して、一般衆庶の運命を憶ひ、ことに終生世に知られざりし無名微賤の人類に無限の同情を寄せたものである。

と言っている。グレイのこの詩に親しんだ明治人の感懐は、そのようなものであったろうと思われる。今日の英学生、いわんや一般読書人にはそれほどに身近なものではあるまい。グレイは明治の英文学の回顧的な詩人になってしまった趣きがある。

しかし英米ではそうでない。この詩が発表されるや否すぐ有名になったことは驚くべきもので、

一七五一年に出版されるや、その年のうちに四つの雑誌に転載され、独立した版本として五版を重ね、その後詩歌集への収載、替え歌や翻訳と、あらゆる形でたちまち流布したのであったが、一つのエピソードが尚もこの詩を著名にした。それは詩人の存生中、『挽歌』出版後九年目の一七五九年九月十二日(七年戦争で英国はフランスとカナダで植民地抗争中)のことであった。グレイの評伝家エドマンド・ゴス(Edmund Gosse)によると

大西洋の向岸では英国軍隊がモントモレンシーの河に沿うて陣を取り、河岸のクェベックを眺め、運命の岐れ路エーブラハムの丘を眺めて、気づかっていたのであった。夜が来た。やがて四千の兵に渡河進撃を命じようとする前、三十三歳の若い将軍ウルフは、あす戦場の華と散って勝利に不朽の名を残す身とも知らず、短艇(ボート)を漕がせ、水上からわが軍の部署部署を視察して回った。美しい静かな夕方であった。櫓(ろ)の音も忍びやかに舟を行(や)る間、将軍は艫(とも)に立ち、傍(かたわら)にいた士官に向って、グレイの「挽歌」のほとんど全部を諳誦して聞かせた。そして言った。「あしたフランス軍を潰滅させる名誉をうるよりも、僕は、この詩の作者になりたいね。」

という話である。これがサー・ウォルター・スコットのペンで、ロバート・サウジー(Robert Southey)に伝えられ、十九世紀の人々が好んで語りついだもので、「挽歌」はますます有名になったというわけであるが、この話は、これほど芝居がかったものではなかったらしいという推察が、

ちかごろはもっと確かな証拠からなされている。わが国でもこの挿話は英文学を愛読した多くの老人たちの記憶しているものである。

グレイは彼と同時代で、彼と仲の悪かった大批評家ヂョンソン博士（Dr. Johnson）の『詩人伝』中で酷評されたので、その酷評によってまた有名になったとさえ言えるが、そのヂョンソンも、この「挽歌」だけは褒めている。

彼の「挽歌」の性格について、私は一般読者と意見を等しくすることを喜ぶ。何となれば、作者がいかに巧緻をかざし学識を誇っていようとも、結局は、文学的偏見によって腐蝕されない読者の常識によってこそ、詩的名誉の賦与は決せらるべきものだからである。「挽歌」は、あらゆる人の心の鏡にうつる映像、あらゆる人の胸が共鳴する感想に溢れている。「しかし、その骨には」という句で始まる四つの聯は独創的であると思う。ああいう考えを他で述べたのを知らない。が、あそこを読むと、ああいう感想は、いつも常に自分が持っていたのだ、という気がするのである。

そして十九世紀になると、マシウ・アーノルド（Matthew Arnold）が、反対に口を極めて褒める。そのようにして十九世紀にはグレイは英国の詩人として古典的な地位に上り、「挽歌」は英国の詩として世界中の人に読まれるに至ったのであるが、今日といえども、彼の詩の鑑賞と研究は衰えない。『ケイムブリッヂ英文学書誌』第五巻補遺篇は一九三〇年から五五年に至る諸研究を記録して

いるが、後期十八世紀詩人という項で、グレイほか七人を列べ、グレイに費した紙面は五欄余、コリンズ一欄弱、スマート一欄、チャーチル半欄、クーパー三欄、マクファーソン一欄、チャタートン二欄、クラッブ一欄半、そしてブレイクがさすがに六欄になっている。今日の英文学研究におけるグレイの位置を想像することができるのである。最近では、アメリカの学者批評家ブルックスと、イギリスの学者批評家ベイトソンとの論争が面白い。グレイは今日も生きているのである。デイヴィッド・セシルが『二つの静かな生活』(一九四八年)に描いた一人はグレイであった。

二　ケイムブリッヂの隠者

トマス・グレイという詩人を私はケイムブリッヂの隠者といっているのだが、何だかそれが適当な定義のような気がする。終りはあの大学の近代史および近代語教授といった職にあったのだけれども、ラテン語で講義しようかギリシャ語にしようか、ちかごろの学生は古典語ができなくて困るなどと言いながら一度も講座を開かずに、一七七一年七月三十日、ペムブルック学寮の自分の室で、胃の痛風で死んでしまった。世に顕われる考えはなかったようである。もっとも、あそこの大学の先生たちは、そのほかに別に世に顕われようとも思っていなかったであろう。さきごろ出たケットン・クリーマー（Ketton-Cremer）の新しい『グレイ伝』を見たら晩年に詩人としても有名になっていたこの教授が、他の学寮の学生に会いに行くと、人々が道の両側に並んで迎えたというから、あの学問の都では、尊敬を受け、満足すべき境涯にあり、別に望むところはなかったのかも知れない。

詩人としては、しかし、確かに有名であった。桂冠詩宗になれと言われて断わったのは、『頌詩』（「詩歌の進歩」と「詩仙」）を出した年だから、一七五七年である。それから十一年目の一七六八年

に初めて『詩集』を出すのだが、詩の数は十しかなかった。それも七つしかなかったのに、「詩の数があまり少なくて蚤か蟻の作品とまちがえられては困るから」と、三つの翻訳詩「運命の魔女たち」「オーディン下向」「オウエンの凱歌」を加えてやっと十になったのであった。「ながものがたり」はあったけれども戯作なので収載しなかった。まことに詩の少ない人で、今日残っている詩を一首二行とか四行とかのものまで入れて全部数えても三十九しかない。しかし、やはり彼は詩人として最高の名誉を与えられていた。彼は代表的なイギリスの詩人であった。その薄冊の詩集の出た年、近代史近代語教授になったのだが、その職が詩人としての名声に押されていなかったとは言えない。

しかしグレイはその教授の職を喜んでいた。近代史というのは、必ずしもちかごろの厳格な意味での近代史学ではなかったであろう。近代語という添え物があるのもそれを語っている。近代文明の有様のことであったに相違ない。グレイはそういうことに趣味を持っていた。グレイは、「ヨーロッパ随一の学者」だと言われた。それは、ヂョンソンの弟子ボズウェル (James Boswell) のところへよこしたテムプルというコーンウォールの牧師の手紙の中にある言葉をヂョンソンが紹介して有名になったのだが、その手紙によると、グレイは「史学博物学のあらゆる分科に深く、英仏伊の斯道の権威書に通じ、考古学者としてもすぐれていた。批評、哲学、倫理、政治学は彼の学問の主要部をなしており、海陸のあらゆる旅行記を読むことは彼の愛好する娯楽であった上、絵画、版

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com